

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2020年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	大阪市に現存する伝統的木造住宅の生活文化—とくに食と住の習慣に着目して—
研究代表者	福田 美穂（大阪市立大学 生活科学研究科 准教授）
共同研究者	小伊藤 亜希子（大阪市立大学大学院 生活科学研究科 教授） 小池 志保子（大阪市立大学大学院 生活科学研究科 准教授） 碓田 智子（大阪教育大学 教育学部 教授） 西川 章江（大阪教育大学 教育学部 准教授）

本研究の目的は、近代都市における伝統的食住習慣について、できる限り明らかにすることである。現在、伝統的な生活文化を考える基礎的研究資料は多くない。したがって、本研究を遂行できれば、そうした研究資料の一例を付け加えることが期待できる。そもそも、このような基礎的研究資料が少ないのには原因がある。というのも、古い住宅がすでにない、あるいは古い住宅があってもそこに住んできた人が他界していることが多く、具体的な家における食住習慣を調査できない、ということがある。ところが、本研究の対象である吉田家主屋（大阪市）は、大正期に建てられた古い家であるだけでなく、人がここにずっと生活してきている。したがって、本研究は好条件を備えた対象を調査、研究できる点に大きな特色があり、かつ貴重でもある。住人が高齢であることから、研究には緊急性もある。

以上のような問題意識を持ち、伝統的食住習慣を調査するのに、二つのアプローチを設定した。一つは、一般的な聞き取り調査、もう一つは行事食の再現である。行事食を再現することで、以前のことをより鮮明に思い出し、食住習慣について詳細に語ってもらうことを期待した。

しかし、コロナ感染のために、行事食の再現は断念せざるを得ず、聞き取り調査も直接対面からオンラインに変更した。そのため、当初計画したような、空間の使い方などを詳しく聞き取ることはできなかったが、オンラインによる聞き取り調査に集中的に取り組み、おおよそ以下のことが判明した。なお、こうした成果の一部を2021年度日本建築学会近畿支部研究発表会にて発表予定である（「1950年代以降の食住習慣からみた伝統的住宅の空間—大阪市の大正期の住居を事例として—」『日本建築学会近畿支部（研究発表会）』2021年6月）。

当家では、建物に関しては、1960年代ごろに台所回りの改造を行い、土間から板敷きに変更、以前はそこにあった流しも室内になった。風呂とトイレも改築した。

住まい方については、銘々膳を戦後も使い続け、ちゃぶ台は1960年代から1972年のあいだで導入された。先行研究によれば、銘々膳に替わってちゃぶ台が導入されるのは1925年が境目、かつ都市部が先行した、という。大阪市内にあって、このように長く銘々膳が使われたことは珍しいと言えよう。また、当家での年中行事の一つに、六月下旬のハゲンショというものがあり、団子を食べたという。ハゲンショは半夏生からきた言葉のようである。半夏生については民俗事典などにも記載はあるが、とくに大阪市内の習俗としては言及されない。大阪市の他の地域での調査が待たれる。当家は式台を供えた玄関を有していて、格式の高さを誇るが、1950年代半ばの結婚式で使用した以外、使われていない（1950年代後半の葬儀で使用した可能性はある）。社会全体として葬儀や結婚式のありかたが変化し、それが当家にも及んでいたことがわかる。また、当家は借家を所有するが、借家人との付き合い方も変化していった。顕著な例は家で葬儀で、1950年代後半、義母の葬式のおり、借家人が当家にきていろいろ手伝ったが、女性の借家人（たち）は当家の台所でまかないをし、結婚して3年にもならなかった若妻（本研究のインタビュー）を二階でずっと休ませていたという。これ以後、葬儀は家でおこなわず、借家人の手伝いのこともなくなり、付き合い方も浅くなっていったという。当家だけが付き合い方を変えたのではなく、社会的な趨勢だったのであろう。このように、当家独特と思われる銘々膳やハゲンショのことがある一方で、葬儀の仕方や借家人との付き合い方の変化は、家で住まい方が社会と切り離せないことをよく示している。